

DORAEMON 「タップ & チャージ」 システム提案の実現化

1 序論とコンセプト概要

DORAEMON (Detached On-demand Rapid Absorption Energy Mechanism for Optimized Networks: 最適化ネットワークのためのオンデマンド分離型高速吸収エネルギーメカニズム) は、50~200 ms 程度の短時間接触によってデバイスへほぼ瞬時にエネルギーを移送する無線「タップ & チャージ」システムを目指す提案である。本質は、エネルギー移送フェーズと使用フェーズを分離することにある。すなわち、高出力の無線バーストでオンボードのエネルギー貯蔵 (スマートパワーキャパシタによる「エネルギーキャビティ」) を急速に充電し、その後はデバイスのバッテリへ時間をかけて放電・充電する。物理的な結合を必要とする直列の無線充電が抱える可動性の制約を、瞬間的な接触でのエネルギー注入により解消する構想である (例: <https://www.volppackenergy.com/post/wireless-charging-with-supercapacitors>)。

このアイデアを確かなものにするには、以下を包含する複雑な理論組みが必要である。

- 短時間パルス中の高率な電磁結合（短時間接触で高い電力をどう達成するか）
- 中間貯蔵 (スマートパワーキャパシタ) の高速吸収ダイナミクス (容量、ESR、リフレクタ等の回路物理による限界)
- バッテリへの最適放電制御 (充電速度と寿命の立場)

以下では各要素を数理的に詳細化し、理論主張が物理的に妥当であることを示す。さらに、MATLAB/Simulink や Python によるソフトウェアで再現・実現できる形に整理する。

2 瞬時エネルギー移送のための電磁結合理論

2.1 相互インダクタンスと共振結合

送電・受電の 2 つの共振コイルは、結合した誘導システムを形成する。相互インダクタンス M は、送電コイルの磁束が受電コイルにどれほど結合するかを定量化する。一般形は次式で与えられる:

$$M = \frac{\mu_0}{4\pi} \oint_{C_1} \oint_{C_2} \frac{d\vec{l}_1 \cdot d\vec{l}_2}{\|\vec{r}_1 - \vec{r}_2\|}. \quad (1)$$

幾何形状によっては数計算が必要だが、コイル間距離が小さいほど、また重なり面積が大きいほど M は大きくなる。結合数は $k = M/\sqrt{L_1 L_2}$ と定義される (L_1, L_2 は自己インダクタンス)。本提案のプロトタイプでは、ISM の $f_0 = 6.78 \text{ MHz}$ に同調し、 $d \approx 12 \text{ mm}$ で $k \approx 0.42$ を達成している。短時間で大電力を移送するには結合が重要である。

2.2 吸収率と最適負荷

等回路モデルでは、 R_1, R_2 を各コイルの損失、 R_L を負荷抵抗（整流・蓄電側で見ると有負荷）とする。結合共振リンクの最大吸収率は、よく知られるように $k^2 Q_1 Q_2$ に依存する ($Q_i = \omega_0 L_i / R_i$)。最適負荷下での理想最大吸収率は

$$\eta_{\max} = \frac{k^2 Q_1 Q_2}{(1 + \sqrt{1 + k^2 Q_1 Q_2})^2}. \quad (2)$$

例えば $k^2 Q_1 Q_2 \approx 0.42^2 \times 200 \times 150 \approx 5290$ とすると $\eta_{\max} \approx 94.7\%$ が得られ、提案と整合する。これは市販無充電より高吸収率で、配充電にも迫る。最適負荷は概ね $R_{L,\text{opt}} \approx R_2 \sqrt{1 + k^2 Q_1 Q_2}$ のスケーリングに合う（受信側損失とのバランス）。

なお、最大電力点と最大吸収率点は一般に一致しない。短時間での捕獲エネルギーを最大化するには、高吸収率点近傍で運用する方が有利なことが多い。

2.3 50 ms をたす答性

6.78 MHz で 50 ms は約 34 万サイクルに相当し、定常移送には十分な周期数である。立上がりは $\tau \sim \frac{2Q_1 Q_2}{Q_1 + Q_2} \omega_0^{-1}$ によりまり、MHz · $Q \sim 10^2$ では μs オーダ。よって、50 ms の大半を吸収的な移送に充てられる。電源側は所望のパルス電力を供給できる必要があり、熱ストレス抑制のためデューティ設計や冷却も重要である（例：100 W × 50 ms = 5 J）。

アライメントの誤差は k を低下させ吸収率を損ねるため、機械的ガイドや磁吸引などで再現性を高める設計がある。

3 スパッタ群による高速吸収

3.1 充電ダイナミクスとエネルギー式

短時間パルスで受けたエネルギーは、まずスパッタ群（SC）群に取り込まれる。バッテリは化学反応がくスパイク電流に不向きだが、SC は高い出力密度で瞬時充放電が可能（ただしエネルギー密度は低い）。有容量 $C_{\text{eff}}(V_c)$ と ESR R_{ESR} を用いると、

$$\frac{dV_c}{dt} = \frac{I_{\text{in}} - I_{\text{leak}}(V_c)}{C_{\text{eff}}(V_c)}, \quad (3)$$

$$E(V_c) = \int_0^{V_c} C_{\text{eff}}(V) V dV. \quad (4)$$

短時間 (50 ms) ではリクは無視でき、支配的損失は ESR である。瞬時蓄積率は

$$\eta_{\text{stor}}(I) = \frac{V_c I}{V_c I + I^2 R_{\text{ESR}}} = \frac{1}{1 + \frac{I R_{\text{ESR}}}{V_c}}. \quad (5)$$

って、 V_c が小さい初期に大電流を流すと $I^2 R$ 損失が卓越し非率となる。低 ESR の素子選、初期は中電流から開始して V_c の上に合わせて電流を高めるテラバ/ランプ波形が有利である。

3.2 最大捕獲のための最適電流波形

目的は T_c 内に $E(V_c(T_c))$ を最大化すること。制約は $0 \leq I(t) \leq I_{\max}$ 、電圧・温度上限など。密には最適制御 (Pontryagin の最小原理等) で解けるが、短時間ではバンバン制御に近い解 (初期は抑えめ → 中盤で加 → 終盤でタップ) や調ランプが用意である。数最適化 (例: fmincon) でも同の傾向が得られる。

熱はパルスでは大きく上せず、累積管理で十分である。

4 最適放電とバッテリ充電理論

SC に貯えたエネルギーは、分離後にバッテリへ數十分かけて移される (2 段階充電: 50 ms で SC 充電 → 30 分でバッテリ充電)。Randles モデル (OCV(SOC)、 R_{int} 、RC 分枝) を用いると、端子電圧は

$$V_{\text{bat}}(t) = \text{OCV}(\text{SOC}) + I_{\text{bat}}(t) R_{\text{int}} + V_{RC}(t), \quad \tau_{RC} \dot{V}_{RC} + V_{RC} = I_{\text{bat}} R_{RC}. \quad (6)$$

務的には CC-CV (定電流 → 定電圧) が最適制御の解と整合し、温度制約に達するまで最大許容電流で充電し、その後は制約 (電圧/温度) に沿って電流を絞る。モデル予測制御 (MPC) や簡易クランプで装可能である。

5 コードによるフレームワーク

- 電磁結合: 幾何・位置ズレ・距離・周波数にする k と率を FEM (COMSOL, Maxwell) または相互インダクタンス素子の回路モデルで走査。
- SC 充電: $V_c(t)$ の ODE を ESR 損失のみで数積分し、定電流 vs テラバ電流の率を比較。最適化で波形を探索。
- バッテリ放電: SC 初期電圧から DC-DC を介して CC-CV 充電を模擬し、SOC 上と温度を評価。
- システム統合: 相互インダクタ + 整流 + DC/DC + 熱のコシミュレーションでエッジケースを評価。

6 現性と推F

- 高性能部品: 高 Q コイル (リツツF等) と低 ESR SC (ミリオFム級) で $\eta_{\text{link}} \sim 95\%$ 、
 $\eta_{\text{stor}} \sim 90\%$ を狙う。
- 安全と規制: 6.78 MHz · 100 W 級でも近接F結合とシFルドで放射を抑え、近接F知・イ
ンタロックをF装。
- アライメント補助: ガイドや磁F吸着で再現性を確保。
- スケFル感: スマホ・ウェアラブル等の中小電力で即F性が高い。EV 等の大容量はFパワ
FやF数タップが前提。
- 段/F列構成: F列受電 → 直列放電などの構成切替で電Fレベル最適化 (要安全設計)。
- 適F制御: 可Fマッチング (バラクタ等) や学習で波形・同調を最適化。
- 多目的最適化: 時間・F率・寿命の優先度にFじてモFド切替 (ブFスト/エコ)。

結論として、DORAEMON のタップ & チャFジはF密な理論・数FFFに照らしてF現可能で
ある。高周波共振結合で短時間・高F率のエネルギーF移送が可能で、SC がそれを損失少なく捕
獲し、バッテリFへ安全に移送できる。次段階として、コFドFFFに基づく小規模プロトタイプ
の構築が推Fされる。

参考文献 (Sources)

- Kurs, A. ほか, “Wireless power transfer via strongly coupled magnetic resonances,” *Science*, 317(5834), 83–86 (2007).
- Wang, X. ほか, “Time-varying systems to improve the efficiency of wireless power transfer,” *Phys. Rev. Applied*, 21, 054027 (2024).
- Volppack Energy Blog, “Wireless Charging with Supercapacitors –The Future of Fast, Convenient Energy Transfer,” 2023 年 3 月 <https://www.volppackenergy.com/post/wireless-charging-with-s>
- ABB Press Release, “ABB demonstrates flash charging electric bus in 15 seconds,” 2013 年 6 月
3 日 <https://new.abb.com/news/detail/43929/abb-demonstrates-technology-to-power-flash-charge>
- Park, S. ほか, “Optimal Control of Battery Fast Charging Based on Pontryagin’s Minimum Principle,” *Proc. IEEE CDC*, 2020 <https://saeohong.github.io/files/CDC2020-PMP.pdf>。